



Title	宝塚・東宝レビュー史にみる近代化と身体統制のイデオロギー
Author(s)	垣沼, 絢子
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/85316">https://hdl.handle.net/11094/85316</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 垣沼 絢子 )	
論文題名	宝塚・東宝レビュー史にみる近代化と身体統制のイデオロギー
<p>論文内容の要旨</p> <p>本論文は、戦前から戦後にかけての宝塚・東宝のレビュー史を、「身体統制」と「近代化」という軸をもとに見通すものである。本論文が論じるのは、パリのミュージックホールで発展した、固有のジャンルとしてのレビューが、日本でどのように受容され、展開していったのか、ということである。日本の場合、それは1927年の宝塚での大々的なレビュー輸入から、1950年代の東宝のヌードレビューへと繋がるものである。本論文では、戦後日本の舞台上のヌードがレビューという形式の中から誕生したこと、戦後のヌードレビューをけん引したのが戦前に少女歌劇でヌードでないレビューに取り組んできた人々であったことに注目し、少女歌劇のレビューからヌードレビューまでが、どのような思想や言説に基づいて繋がられていったのかを明らかにする。そのために貫大戦期の多様なレビューの実践を取り上げることせず、固有のレビューを取り入れようとした人々の試みが、いかに同時代の政治的・社会的な「近代化」と「身体統制」に関わっていたかを考察する。</p> <p>序章では、レビューを取り巻く先行研究を概観し、近代資本主義、民主主義および機械社会の到来という「近代化」と、レビューの集団舞踊をもたらす「身体統制」が、世界的に研究の中でこれまでどのように関連付けて語られてきたのかを確認し、本論文全体に通底する問題意識と理論的枠組みを提示した。レビューの研究は多くの場合、ラインダンスの集団舞踊に同時代社会を読み込むという方法が行われてきたが、日本のレビュー研究にそのまま当てはめることは出来ないという課題がある。日本では少女歌劇が中心となってレビューを受容していたため、レビューが近代化の象徴という意味を必ずしも体現するものとして発展しなかった。レビューという言葉が固有のレビュー以外のものを指すことが多い一方で、固有のレビューがショーやストリップなど別の言い方で表現されることもあった。また、日本のレビューでは、西洋舞踊に基づく統制された身体美を理想と掲げる一方で、体格の限界や西洋舞踊への親和度の低さなどから、日本人ならではの身体美の模索も行われた。日本において固有のレビューが本格的に展開された占領期、GHQ/SCAPによる検閲や制限との関係も考慮する必要がある。</p> <p>こうした課題に基づいて、本論文では時代と対象を二つに分け、宝塚と東宝レビュー史について分析した。</p> <p>I では、宝塚少女歌劇（以下、宝塚）での戦前のレビュー輸入に着目し、レビューでもたらそうとした近代化について分析した。</p> <p>第一章では、日本にレビューを大々的に流行させた宝塚初のレビュー『モン・パリ』（1927年）の上演に際し、岸田辰弥がレビューをどのように理解し、レビューによって何をもたらそうとしていたのかを明らかにした。レビュー形式の作品が目された背景には、海外で宝塚の公演を行うための方法を模索するという意図があった。岸田はレビューを、西洋近代の価値観を日本に取り入れるために活用しようと考えた。岸田は『モン・パリ』で、演者と芸の近代化、舞台機構の近代化を通して、テンポが速くプロフェッショナルな技術と態度を日本の演劇に根付かせようとした。そのために『モン・パリ』には、フランスで実際に行われたレビューから、様々なものが取り入れられた。これまで言われてきた、ラインダンスや大階段といったことだけでなく、実際に岸田が現地で見たとレビュー作品と『モン・パリ』を比較し、具体的に様々な場面や舞踊がそのまま取り入れられていることを明らかにした。また、『モン・パリ』の主題を改めて確認し、主題歌を通して観客が岸田と一体化する可能性があることを考察した。</p> <p>第二章では、演劇環境の近代化という岸田の考えが、その後の宝塚では宇津秀男という演出家に引き継がれたことを、言説研究から明らかにした。宇津は1930年代にフランスのレビューからアメリカのショーへと参考対象を移行しようとし、少女歌劇によって甘ったるくなったレビューから再び近代化を目指そうとした。二度のレビュー論争と呼応するように、アメリカ宇津の『ブロードウェイ』（1930年）と『マンハッタン・リズム』（1937年）は存在した。こうした作品が上演された1930年代は、宝塚が軍事プロパガンダを強化していった時代でもある。『モン・パリ』時に企画されたが実現されなかった海外公演も、同時代の政治や権力と結びつきながら実現されている。</p>	

ここでは二度行った海外公演の帰朝公演のレビューを分析し、それぞれの作品が、どのように他国やレビューへの憧憬をプロパガンダの中に組み込んだのかを作品分析によって明らかにした。岡田恵吉という演出家は、『ブルウ・トランク』（1937年）において、ドイツを舞台にした劇中劇の中でパリへの思いを強調し、宇津は『我等が旅行記』（1937年）において、興亜日本を宣言しながら、アメリカの舞踊の激しさと楽しさを強調した。フランスとアメリカへの憧憬は、この後のヌードレビューにおいても、継続されていた。

II では、戦後の東宝でのヌードレビューの展開に注目し、どのような検閲と身体統制が行われたのか、どのような身体が近代化の象徴とされていったのかを考察し、国家の表象とヌードの関係、国家のイデオロギーと身体統制のイデオロギーを考察した。

第三章では、占領期に誕生した日本の舞台上のヌードについて、言説および台本分析によって、戦前のレビュー輸入時の思想や論争との関連を明らかにした。戦前の日本劇場でアメリカのレビューを模していた秦豊吉は、1947年に始まる額縁ショーを通して、女性のヌードに戦後の復興と西洋化という希望を象徴させた。秦はフランスのレビュー、岡田はアメリカのバーレスクの実現を声高に主張し、レビュー形式でのヌードの舞踊がストリップと呼ばれながら上演された。一方、GHQ/SCAPにとってみれば、それらの美学的あるいはイデオロギー的な観点よりも、観客への倫理的な影響が懸念であった。台本の事前検閲、舞台稽古の事前検閲、上演の事後検閲を駆使しながら、GHQ/SCAP側は舞台上のヌードが社会秩序を混乱させることのないように、自主的な倫理協定の提携を斡旋し、権力を行使していった。実際、検閲台本には舞踊の振付は書かれなかったことから、上演の美学的な観点は注目する手段はなかった。また、当時行われた会議録から、GHQ/SCAPは自身の組織内の人々への教育的観点から、舞台上のヌードを規制しようとしたことを明らかにした。

第四章では、占領終了後の東宝のヌードレビュー劇場が、どのような戦略によって自身を「真のレビュー」として価値づけていったかを、言説分析および作品分析を通して明らかにした。宇津秀男、岡田恵吉、丸尾長頭など戦前の宝塚でレビューに関わった人たちは、戦後は日本劇場で、日劇ミュージックホールというヌードレビュー劇場を運営した。そこではフランスのレビューを目指したりアメリカのショーあるいはミュージカルを目指したり、試行錯誤が繰り返された。初期の日劇ミュージックホールでは、在日米兵の観客や進駐軍クラブに出演していた人が数多く、アメリカとの関係が密接であった一方、言説上は、フランスのレビューの真の体現として自身を規定していく形で宣伝された。在日米兵の数が減少し、戦前のレビュー出身者からの代替わりが起こる中で、日劇ミュージックホールは在日米兵向けの言葉を中心としないレビューから、日本人向けの物語やコンテキストを重視するレビューへと変わっていたことを明らかにした。

第五章では、こうした変化の時期、東宝のヌードレビュー劇場で、西洋的な身体美や価値観から日本人という「民族」の身体を再発見しようとした武智鉄二の試みについて、作品分析、言説分析、歴史分析を行った。武智は大阪にあったOSミュージックホールにおいて、伝統芸能とヌードを組み合わせる実験を行った。当時の武智は、はじめはカリカチュアとして、徐々に自身の同時代の前衛演劇の演出技法に応用する形で、ヌードレビュー劇場での上演を繰り返したことを明らかにした。当時の武智は、フェミニズムの理論に呼应しながら、ヌードを用いて日本人女性の社会的な立場や思想、民族固有の身体のあり方を模索していたところであった。ヌードレビュー劇場での舞踊の見つめ直しを通して、武智は近代化させる伝統芸能の対象を能から舞踊へと移していったこと、生涯主張することになる原初生産性に基づく民族固有の舞踊の理論化につなげていった可能性を、言説分析や演出分析によって明らかにした。また、武智のヌードレビュー劇場での実践が、1960年代以降の武智の映画作品と思想的に関わるということ、武智の初の映画で冒頭に取り入れられたヌード能に注目することで明らかにした。日劇ミュージックホールにとって武智の作品は、第四章で指摘した変化の時期に、日本を見つめ直すものとして位置づけられる。一方、OSミュージックホールにとって武智の作品は、日劇ミュージックホールとは異なる大阪の独自性を実現するために重要な契機となっていた。

以上の分析によって、宝塚・東宝における固有のレビューの展開を、近代化と身体統制という軸から明らかにした。宝塚での少女歌劇のレビュー、日本劇場での舞踊を中心としたレビュー、ヌードが登場する占領期のレビュー、占領終了後のヌードレビュー劇場において、戦前・戦中と戦後という分け方ではなく、貫大戦期という観点から、思想の継承を明らかにした。それらはいずれも、レビューの集団舞踊や構成を通して西洋近代化の価値観を日本人に内面化させようとする試みであった。一方、武智とヌードレビュー劇場の交錯は、両者にとって、表現方法の変革の時期と一致する。1950年代後半からの社会の急激な変化とともに、貫大戦期のレビューの展開とは異なる近代化と身体統制のイデオロギーが武智によって持ち込まれ、日本人の身体、アジア人の身体が強く希求されるようになるのであった。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 垣 沼 絢 子 )			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	永田靖
	副 査	大阪大学 教授	輪島祐介
	副 査	大阪大学 准教授	古後奈緒子
	副 査	大阪大学 准教授	中尾薫
<b>論文審査の結果の要旨</b>			
以下、本文別紙			

## 論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 宝塚・東宝レビュー史にみる近代化と身体統制のイデオロギー

学位申請者 垣沼絢子

## 論文審査担当者

主査	大阪大学教授	永田靖
副査	大阪大学教授	輪島祐介
副査	大阪大学准教授	古後奈緒子
副査	大阪大学准教授	中尾薫

## 【論文内容の要旨】

本論文は戦前から戦後にかけての日本のレビュー史を、とりわけ宝塚と東宝に絞り、そこに見られる近代化と身体統制の様相について歴史的かつ言説的に論究をしたものである。序章において先行研究の概観を踏まえて問題設定を行ったのちに、第1章において宝塚でのレビューをとりわけ岸田辰彌作『モン・パリ』(1927)を取り上げた。そこでは作品の構造として観客がレビューを内面化するものであったこと、また日本の舞台機構や演劇環境の近代化が目指されたことを明らかにした。第2章においては、その演劇環境の近代化という岸田の理念が宇津秀夫に受け継がれ、宇津演出のレビュー作品『ブロードウェイ』(1930)と『マンハッタン・リズム』(1937)などの作品に結実していくことを明らかにした。また戦時中に軍事プロパガンダ的作品を上演した宝塚レビューの概観を踏まえ、ヨーロッパ公演帰国後のレビュー岡田恵吉『ブルウ・トランク』(1937)、宇津秀夫『我等が旅行記』(1937)を取り上げて、そこに見られる宝塚独自の国家表象を明らかにした。第3章では戦後占領期のレビューについて、戦後の性の解放という文脈の中で取り上げられた裸体についての議論を参照しつつ、この時期のレビューの展開の実相を明らかにした。ここでは1920年代の宝塚でのレビュー移入時の「裸体」の要請が戦後において再考され、本格的なレビューを創造するためには裸体が必要であることが再認識されたこと、またその裸体は西洋風の理想の身体として措定されていたことを明らかにした。またそれらを上演する時にバーレスクという形式が用いられたことの意味合いを解明した。また国立公文書館のアーカイブを紐解き、この時代の占領軍のレビューの検閲についてもその実相を明らかにし、裸体に対する両義的な姿勢のあることを示した。第4章では占領終了後の東宝のヌードレビュー劇場を取り上げ、そこに戦前の宝塚レビューに関わった宇津、岡田、丸尾などが1952年から始めた日劇ミュージック・ホールでの実践について考察した。そこではフランス的レビューかアメリカ的レビューという論争を踏まえて、ここでのレビューが戦前の宝塚レビューの国家表象を継承するものであったにもかかわらず、1950年代前半の観客は多くが進駐軍や米兵などであったことの矛盾を明らかにした。そして進駐軍の撤退後には徐々に日本人観客が多くなり、作品の内容も日本の古典芸能を取り組むなど、日本人向けのものになっていくことを明らかにした。第5章では、1950年代中盤からヌード・ショーを実験していく武智鉄二の理念と実践について探求した。この時期に武智は能や歌舞伎という日本の伝統演劇を現代化する試みを実

践しているが、その中で東宝のヌードレビュー劇場である OS ミュージック・ホールでヌード・ショーに能楽を結びつけた「ヌード能」を創作していく。ここでは『能楽教室』(1956)、『かつばの湖』(1956)、『能楽コント』(1956)、『スポーツマン—刀斎』(1957)、また映画『日本の夜 女・女・女物語』(1963)などの作品を取り上げ、そこに能がどのように取り入れられているのかを明らかにしつつ、その民族の固有性の身体のあり方を探求する独自の美学を解明した。全体として本論文は、日本レビュー史を戦前の宝塚と戦後の東宝のそれに基づき、そこに見られる近代化への志向とその実践、そしてそこに生じた身体統制の実相について明らかにした。

#### 【論文審査の結果の要旨】

全体に従来本格的に論じられることの少なかった日本のレビュー史の、とりわけ戦前の宝塚と戦後の東宝のレビューの歴史を、近代化と身体統制という観点から膨大な資料を活用して概観していく論文である。取り扱いの困難なレビューという舞台芸術について、その多くの側面を明らかにしたものであり、高く評価された。例えば、岸田の『モン・パリ』がフォーリー・ベルジュール『今日のフォーリー』や『フォーリーの心』などにその源泉があること、この時代の宝塚レビューではフランスのレビュー派とアメリカのレビュー派との論争があることが戦後日劇ミュージック・ホールでのレビュー創造に受け継がれていくこと、そもそも従来の宝塚歌劇研究ではその家庭娯楽的な特質を反映してエロティシズムの観点からの研究が希薄であったが、この研究ではこの観点からのアプローチを開拓して見せたこと、戦後占領期のレビュー検閲の実態について米国国立公文書館のアーカイブを紐解き、米国側の資料を基にして裸体に対する両義的な姿勢を明らかにしたこと、またこれら舞台表象となった裸体は西欧近代の理想の身体としてのそれであり、戦後日本の復興期の言説と呼応しあっていたこと、あるいは戦後の日劇ミュージック・ホールではバーレスクの形式にヌードレビューを吸収させることで展開したこと、東京の日劇ミュージック・ホールと大阪の OS ミュージック・ホールを比較的に検討し、両者の差異を明確にしたこと、また武智鉄二のヌード能について詳細な分析を試み、武智独自の伝統演劇の現代化の理念と実践について詳細な考察を行ったことなど、多くの点があげられる。

他方で問題点も多く指摘された。題目が示すような近代化と身体統制のイデオロギーという論点には必ずしも収斂はしていない点、ややもすれば考察が先走り資料をより明示的にしていく必要があった点、また一つの論文としての枠組みをより明確に示す必要があった点などが指摘された。また論文の中で取り上げられた事例は多岐にわたり過ぎる傾向があり、一貫した論理が展開されるというより、さまざまな点が問題点として提出しているままで終わっている点、実証主義的なアプローチとヒストリオグラフィー的なアプローチとが混在し、上演の実相が不明瞭のまま議論が先に進むといった点も今後の課題として指摘された。さらには戦前宝塚のレビューと戦後東宝のレビューとを中心に取ることで日本のレビュー全体を通す筋道を探求することが、例えばそれ以外の多様で雑多なレビューの実相への認識を遠ざけてしまっているのではないかという点、さらには先行研究に対して明解で批評的な観点を示し得ていない点、女性の舞台表象を課題としているにもかかわらずジェンダー論的な観点からの考察が希薄な点など今後の課題として認識された。

このような様々な問題点があるものの、全体には膨大な資料を渉猟して日本のレビュー史の多くの側面に照明を当て、新事実を多数明らかにしている点に加えて、日本の舞台芸術の近代化と身体という中心的なテーマにレビュー史の側からアプローチした優れた研究であることが認められた。よって本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。